

文末詞「い」

栃木地方方言における

大橋勝男



る。意味は、「ナ」「ネ」という文末詞と同じである。働きは、
I、相手に話しかけながら相手の同意を得ようとする意図をつけ加える。

述べてきた最後に「ナイ」をつけ加えることよって「ナイ」の
つく前まで自分の述べた事を自分も相手も共に共鳴するというよう
な姿勢での言い方である。

○ズイブン アツイ ナイ。

ずい分暑いですね。(青女↓私)

「ズイブン アツイ」というのは青女のその時の気象に対する感じ
である。青女は、相手の私もこの気象を暑いと感じているだろうと
思っている。そこで「ナイ」をその下につけ加えて二人で暑いとい
うことに共鳴しようとしたわけである。更にいくつか例をあげる。

○ゼンゼン カワキキツタ ナイ。

ぜんぜん(まるっきり)乾ききってしまいましたね。(老男↓

中男)

○ホントニ シツパイ シツチッタ ナイ。

○ホネ オレン ナイ。

骨が折れますね。(老男↓中男)

○イナカジヤ ナンニモ ナクツテ ナイ。

田舎では何もなくてね。(中女↓中男)

栃木県都賀地方に行なわれる文末詞に、右のような「ナイ」があ

全く失敗してしまいましたね。(老男↓私)

2、相手に訴えかけつゝと同じく相手と共にその事実について共鳴し詠嘆する。

○オシメリモ スコシナクツチャナイ。

おしめり(雨のこと)も少し位なくてはねえ。(困りますね。)

(老男↓私)

これは、詠嘆を込めて相手に訴えかけ途中で言いさしている。余韻をもたせる言い方になっている。

○サーツトデ ナイ。

たとえ雨が降っても、さーっとわずか降るだけでねえ。(困ったものですね。)(老男↓私)

これなども同じである。

また、その詠嘆が強くなると、相手にうったえるということを離れて自分だけの詠嘆にもなる。

○スコシモ ネーツテ ゴトモ ネーゲットモ ダメナンダ ナイ。

全くないということもないのですがやっぱりだめなんだなあ。

(中男↓中男)

3、相手に強くうったえかけ相手に聞いてもらおうとする言い方になる。

○イマ ウツタツテ ソーバ ワルゲ ネーンダガン ナイ。

今売っても決して相場は悪くないですよ。(それなのに売らないのですからねえ……。)(老女↓私)

これは、愚痴などを相手に聞いてもらおうとする時に強くうったえかける言い方である。後に余韻として「それなのに……」なのだか

ら。」というような内容のひびきの残るばあが多い。また、それ程強くなく、次の例のように唯話の途中などで相手の注意を喚起して次に自分の話そうとすることの前提を相手に確認させるような言い方にもなる。

○ハシヤギカ スキナンダカン ナイ。

この植物は、かわいた所が好きなのですからね。(中男↓私)

○ハチジ コータイダカン ナイ。 ラクナン セ。

八時が交代ですからね。楽なですよ。(老男↓中男)

4、説明や報告における断定的な表現をやらわらげる。

○ダゲツトモ ハダゲノホーワ マズゲダ ナイ。

ですけれども、畑の方はまずそう(できが悪そう)ですね。

(老男↓私)

この場合「マズゲダ」と言い切ることもできるのだが、少し強いひびきになりすぎるので、それをおそれて「ナイ」がつけ加えられたのである。更に例をあげると、

○ダメダ ナイ。

だめですね。(老男↓私)

○オグレンノワ オグレダ ナイ。

遅れる事は遅れましたね。(老男↓中男)

5、間投助詞的用法

○キノホーガ ハナイV フクラムンダガ ナイ。

木の方がハねえV、ふくらむのですがねえ。(老男↓中男)
このばあいのハ V印のついた方のナイは、相手に親しく話しかけ、文中において息の切れ目につけられる。

Ⅰ

さて、以上、「ナイ」の働きを見てきたが、最初にも述べた通り、これは、「ナ」「ネ」「ネ」の方が当地では、用いられ方が少ないが」という当地における文末詞とほぼ同じものである。にもかゝらず、「ナ」「ネ」の一方「ナイ」が共存するからには、それぞれ、それ相応の存在しなければならない特性をそなえていると見なければならぬ。そこでその違い、即ち、同じ文末に「ナ」「ネ」を使つたばあいと「ナイ」を使つたばあいの違いは一体どんなところにあるのかということについて調べて見ることにする。

今、上にあげてきた実例において、話者に対する聞き手をずっと見ていただきたい。中男と私とになっている。話者の方はすべて地元の人である。それに対し、聞き手の中男の人というのは話者にとつては久し振りに訪れられたお客さんである。また、私ははじめて調査者、研究者として訪れた一種異様ないかめしい他人である。話者にとってはいづれも気のおける相手であることがわかる。したがって話者の話す姿勢も当然あらたまつたものであることは間違いない。そこに「ナイ」が使われているのである。事実、こういうような関係では「ナ」や「ネ」は全く聞く事ができなかった。しかし、他の親しい地元の人同士や、目下の者に対しては多く「ナ」や「ネ」(「ネ」の方がずっとすくないが)が使われていた。ということでは、「ナイ」の方が「ナ」「ネ」よりもあらたまつた言い方であり、相手を意識した丁寧な物言いであるということができよう。すると、丁寧な物言いになるか、ぞんざいな物言いになるかの違いは「ナ」に「イ」がつくかつかないかの違いということになる。

現在使われている当地の「ナイ」は完全に熟して「ナ」と

「イ」とに分けることは困難であるが、元は明らかに「ナ」と「イ」とは別のものであろうと思われる。そのうちの「ナ」は現在使われている「ナ」と同じものである。では、「イ」というものを分離させて一体「イ」自身に何か独立の或る働きがあるのかということになるが、それについて考えるに有益な事実がある。

○ナ | イ。

(全くそうですよ) ねえ。(老男↓中男)

この文は文末詞だけでできている。このばあいだと「ナ」と「イ」とは、まだ完全には熟しきつておらずむしろその途中の姿ということができよう。このばあいだと「ナ」と「イ」とは分けられそうでもある。「ナ」とのばしているところにも、「ナ」が一つの語として独立している証拠がうかがえる。この文の意味上の主体は「ナ」の方にある。だから「ナ | イ」と、ここで言い切つても十分なわけである。では、「イ」は何故つけられたのであろうか。「ナ | イ」だけでは言いすまされぬ何物があったわけである。それはどこから来るかという点、相手が気のおけるお客であるということからである。すなわち、「ナ | イ」と言い切つたのではぶしついで荒っぽくなるような相手なのである。そこで、それを緩和しものやわらかな表現にしようとして「イ」がつけられたのである。このことは「ナ | イ」と「ナ | イ」と二つの言い方を並べて比べた時明らかに感じられたことであつた。

このような事実によつて、「イ」という語が独立し得るのではないかと、少くとも、元は独立していたのではないかというふうに見えることができるのである。そして、その働きは目上の人やはじめの人やお客さんなどに対し、丁寧なものやわらかな感じや意味をつけ

加える働きをもっているのではないかと思われる。そこに、気おける人に対しては「ナ」が使われず「ナイ」が使われる原因があるのではないかと考えられるのである。

Ⅱ

金田一京助先生の「国語の変遷」に次のような一節がある。

「この『江戸ッ兒だつてね』の『ね』も古く溯ると『契りきな』『花のいろは移りにけりな。』『汝は平家の侍よな』『家にして我は恋ひむな』『あはれに添う侍ふな』などの『な』で、関西では『これがな』『さうしてな』の『な』また『う』をつけた形の『なう』から『喃』になって『これがう』『そしてう』となるのに関東では『な』は荒っぽくやはりを添へてやさしく『これがない』『さうしてない』といったものらしく福島県下などには今も『ない』があつて『なあ』というより丁寧になる。宮城、山形へ行くと、それがネエになつてゐるから、多分江戸ッ兒の『これがね』『さうしてね』の『ね』も『ない』の早口にいった形であろう。

(国語の変遷P 60—61) 1

ここでいわれる福島県下の「ナイ」が、もし当地方の「ナイ」と同じ物ならばこの御論考は大層参考になる。そこで、福島大学の菅野宏先生に福島県に行なわれる「ナイ」の実態を手紙でお聞きしたところ、次のような御返事をいただく事ができた。(関係する部分のみを要約して載せる。昭和三十七年九月八日付のもの)

1. e という丁寧を表わす助詞があつて e が単独でかなり自由に使われている地域もある。それは、福島県北地区である。
2. その e がやゝ固定化(退化)し接辞化している地域もある。終

助詞に「*ne, zoe, (coe), kae(ge), hae, wa e* など」という形をつくっている。主に福島県中央部(安達郡、二本松市から南の中通り地区)一帯に見られる。頻度としては、*nae* が最も高いものである。福島県下の *nae* の丁寧なことは間違いない。例えば
hidee ame da nae.
soezu wa ee nae.
amari esoshikute cito kutabiTeja mo'n da garanee.

という具合で栃木県の「ナイ」も全く同じものであると思う。

3. また、退化が更に進み *ne, se, gu, i* になつてしまつた石城地区のようなところもある。」

これにより栃木県の都賀地方の「ナイ」と福島県におけるナイ(*nae*)とは同じものであるということが言えると思う。(ただし、*[nai]* (*nae*) という違いはあるが、これは、発言上からくる違いであつて内容は同じことである。)

これによつて、栃木県都賀地方における「ナイ」の考察に、金田一先生の御論考は、有力な手がかりとなることになつた。

ところで、金田一先生が先のようなお考えに到達するにいたつた諸々の資料や、御考察の過程などにつき、もう少し詳しく確かめる必要がある。これをふまえて考察を進める関係上、砂上の楼閣にならないためにも、しっかりした岩盤かどうかを確認する必要がある。そこで手紙で直接、次の点についてお尋ね申しあげた。

1. 「関東では『な』は荒っぽくやはりを添へてやさしく『これがない』『さうしてない』といったものらしく……」という御判断を下すに足る文献等があるかどうか。

2. 「ナイ」↓「ネ」という変化と見る御判断の根拠は何か。

3. 「な」に「い」をつけることによつてやさしい言い方になつ

たというが、ではその「い」は何か。

そのお答は次の通りである。(原文通りそのままをのせる。昭和
三十七年九月六日付のもの。)

お答

金田一京助

(1) 文献にハッキリ出ていたら、私が言う以前に誰でも、それによつて、説明したはず、文献にはっきりそう見えていないため、今まで誰も説かなかつた

古文獻は、文語でばかり書かれ、口語では書かれなかつたから、口語の史料がないのです。この欠点を補ふものに、ありがたい方言の現在尙到る所に存することです。それで、それによつて私が説を建て

「こうしか考えられない、こう考えることによつてのみ解釈ができる、それだから、こうく成つたものに相違ない」という私の説明です。

2、古典の「な」の所を口語で「ね」というのは、*navae* という単なる音韻変化と片づけるのは、乱暴で、可能性があつても必然性が出て来ない。もっと歴史的に裏づけて、なつとくしたいのが私の念願、そこへ丁度よいのは方言の存在、方言は、昔の面影を止めるから、

即ち「な」が「ね」となる一つ前に、「ない」と言つたもので、

江戸ッ子はその *ai* をみな *ee* にする—— *haijai* (俳偕) → *hekeke* (俳偕)、心配をシンペー、大い(て)をドッケー、痛(い)をイテー、入(る)をへール、「無い」「無え」など

この傾向が、「そうだない」を「そうだねえ」と言つたにちがいないのです。

福島ばかりでなく、承れば栃木もそうだそうです、これがもと
は、「江戸」でもそうだったのを「江戸」は急先鋒で「ねえいね」
にしてしまったのは、周辺の方言は律義にその一つ前の形を今に用
いていると解すべきでしょう。

では、「そうだない」の「い」は何か？

これは、やはり方言に原型を発見します。東京周辺の人の方言の
さもく方言らしい響きを感じさせる語氣に

「そうですか」でいい所を「そうですかよ！」

「ありました」でいい所を「ありましたよ！」

「ありませんか」でいい所を「ありませんかよ！」

この「よ」は勿論文語の詠嘆助詞の「よ」で、標準語にだつて、
「私よ！」「あなたよ！」「そうよ！」など使っている「よ」の感
情を楕びて長くひっぱつていうのです。

さて、この「よ」を、ひっぱつて田舎臭く発音せずにとめたのが
「い」で、この「い」は一つでは独立性がなく

「そうだない」、「そうですない」、「これがない」

など「よ」の代りに、「よ」を軽く発音した形なのです。標準語で
も、「そうかい」「君も行くかい」「それでいいかい」と言つて
立派に使っているものです。これを又田舎の人や江戸ッ子などが
「そうケェ」行くケェ？」「それでいいケェ？」などという、あれで
す。

そのように、

そうだなよ——そうだない——そうだねえ——そうだね。

と音韻変化を遂げ得たのに外ならないようで、こう解してのみ初め
て納得行きますが、外の考え方は納得できない

それ故にこれをもって真相だつたにちがいないと私は断言するの

です。

3、も、右の説明の中でお答へし得たと存じます。栃木の語例有りがたく頂戴すれば

いいてんきだなよ——いいてんきだない

中々暑くてなよ——中々暑くてない

これによって古文獻による資料は得られないこと、金田一先生も広く方言界にその資料を求めておられ方言の実態が重要な資料となることがかかる。そこで、栃木県方言における更に他の資料を求め検討することによって「イ」の姿を明らかにしていきたいと思う。

IV

福島県には、一部ではあるが「e」という丁寧な助詞があるというのであった。しかし、全体としては、固定化、退化の現象がはなはだしい様子であった。栃木県のばあいも「イ」は、やはり、他の語と結びついて固定化し、分離できないところまで来ている。先の「ナイ」もそうであった。したがって、「イ」を見つめようとする時は、「イ」だけをとり出して部分的に見ていくというのではなく、他の語と結びついて固定化している全体の姿としてそのままを見ていく必要がある。そこで、全体として見ていく時、次のようなものをあげることができる。

1、サイ

これも都賀地方においてのみ見い出されるものである。

○ト¹ツタミ²チナラ³マ⁴イ⁵ン⁶サイ⁷ナ⁸。

通った道なら、まだ良いのですよ。(老男→中男)

○ソ¹ー²サイ³。

そうなのさ。(そうなのです。)(老女→私)

○キノ¹ワ²アレ³サイ⁴……。

昨日はあれだ……。 (中男→中男)

これらの例の見えるのも、話の受手は、私、中男であって気おける人の場合である。「サ」の方は、いわゆる東京方言の「サ」と同じ報告、説明における指定、強調などを表わす準感声的文末詞サ行音一派に属するものである。この「サイ」もずい分熟してはいるが、「ナイ」程ではない。

また、「サイ」から派生したものに「セ」「セイ」がある。

イ、セ

これは「se」→「so」という相互同化による変化で生れたものであるから、意味、働きの上に、なら「サイ」との避いはない。

○ナガナガ¹コンデ²タイヘンナン³セ。

なかなかこれで大変なのですよ。(老女→私)

○イズン¹マデモ²コドモデ³ショーガネン⁴セ。

いつまでも子供で仕方がないのですよ。(中女→私)

○ソラ¹ソー²セ。

それはそうですよ。(中男→私)

ロ、セイ

右の「セ」に更に「イ」がついたのである。

○キノ¹ワ²アレ³セイ⁴……。

昨日はあれだ……。 (老男→私)

○コノ¹ゴロ²ジヤ³カマゴト⁴ネー⁵モツテ⁶キツチヤ⁷ン⁸セイ⁹。

この頃ではかまわず持ってきて来ちゃうのですよ。(中男→中男)

○ナン¹シロ²ムスカ³シン⁴セイ⁵。

何にしても（とにかく）むずかしいのですよ。（老男↓私）

この「サ」↓「サイ」↓「セ」↓「セイ」という一連の変化の過程は「イ」の考察に非常に多くの示唆を与えてくれる。すなわちまず「サ」を丁寧な言い方にして「サイ」としたわけである。それが発音上の変化で「セ」となった。これは、発音上の変化にすぎないから、意味・用法に変わりはないが、その「セ」に何故更に「イ」が付加されねばならなかったのか。これを考えることによっておのずから、「イ」というものの姿もはっきりしてくるのではなからうか。今、これを考えるに参考となる資料がある。

「仰せらるの仰すは、それ自身敬意を有するのであるから敬語を重ねたことになる。……（中略）敬語はこのように頻繁に用いられるようになると敬意は次第にうすれて更に別の敬語が付加されて行き、遂にいよゝゝ敬語の使用度数を増加するのである。（今泉忠義「国語発達史大要（P.183）」）

これと同じように考えて良いのではなからうか。とすると、この「い」の独立性がいよいよはっきりと感じられるのである。これによって、現在こゝ他の語と熟し固定してしまっているが、文末詞「い」というものの存在が、歴史的に近い過去において考えられ得るのではなからうか。それは、おとなりの福島県において「e」という丁寧の助詞の存在することと考えあわせる時、一層明確になるように思われるのである。

2、カイ

これは栃木県全般に見られる原生単純形式文末詞である。「カ」という文末詞と共にこの「カイ」が存在するのである。

○オバサン ヨ。コノミズノメン カイ。

おばさんよ。この水飲めるのですか。（少女↓中女）

○コレ ヤツタラ イッテ イーンカイ。

これをやったら行っても良いのですか。（少女↓中男）

○チロツト ソレ ダシテ クンネー カイ。

ちょっと、それを出してくれませんか。（中男↓青男）

これも、「カ」よりは、「カイ」の方がおだやかで丁寧な言い方となる。話手と聞き手との関係を見ると、最初の例と次の例は、少女から中女、中男への物問いであり、最後の例は、中男から青男だが物をたのむ時に用いられておりいずれもものやわらかな丁寧な言い方になっている。これによっても、「イ」というものに独立の働きがあるように思われるのである。また、この「カイ」から派生したものと思われる「ケ」がある。

ケ

これは、[tʃai]・[kei]・[ke]という相互同化によって生れたものであって「カイ」と内容は変わらない。唯、「カイ」よりはもっとくだけた言い方ではある。

○コノメー ケ。

この前ですか。（老女↓中男）

○コゴエ カラムン ケー。

ここに巻きつけるのですか。（子男↓中男）

○タマーニ クツ ケー。

たまには来ますか。（老男↓私）

このように、親しい言い方の中にも相手をややまう上品な言い方となっている。

3、ダイ

これは、断定の助動詞「ダ」に「イ」がついたものと考えられる。栃木県全般に見られる。

○ソゴ ミギー イゲンダイ。

そこを右へ行くのです。(老女↓私)

○カギツテ ナンダイ。

牡蠣というのはいですか。(子男↓母)

○ソーナンダイ。

そうなのですよ。(老男↓私)

これらの例によってもわかる通り「ダ」ということばには、非常に強い断定のひびきがあるためそれをやわらげるために、「ダイ」となったものであろう。事実、「ダ」よりは、「ダイ」の方が、ひかえめでものやわらかな表現となる。

4、ダイ

過去の助動詞「タ」に「イ」がついたものと見られる。栃木県全体に行なわれる。

○ドーシタイ。

どうしましたか。(中男↓少男)

○ヤンナッチッタイ。

いやになってしまいましたよ。(少女↓少女)

○ノツパグッチャッタイ。

汽車に乗りはぐってしまいました。(青男↓私)

○ジューゴフン ハヤク イガサツタイ。

思いの他、十五分早く行きつきました。(青男↓私)

これは、むしろ、平易な親愛の情のこもった表現となる。

以上、「イ」に着目しながらさまざまな例を見て来た。これを働

きの上から整理してみると次のようになると思う。

1、丁寧、尊敬……ナイ、サイ、セ、セイ、カイ、ケ、(ダイ)

2、親愛、平易……ダイ、タイ

(この他、菅野先生のお手紙によると福島県では、ワイ、ゾエ、ゼイ、ネイ、ネエなどがあるという。栃木県では、ワイなど少しは見られるが、ほとんど行なわれていないと言える。)

Y

これによって、先ず、栃木県には文末詞「い」というものがある。しかし、現在、大体においては、非常に固定化し熟した形で他の語と結合し別の文末詞などを形づくっている。が、「い」本来の意味、用法は、別の語を形づくっても失なわれずその中にはっきりと残って居る。また、「だい」や「たい」のように、まだ完全には熟し切らず、現在、熟合する過程で行なわれているものもままある。その本来の意味、用法とは、丁寧な物言いにしたり、親愛の情のこもった言い方にしたり、断定的なきつい表現をやわらげ、ものやわらかな表現にしたり、気やすい平易な表現にしたりする働きである。このような文末詞「い」は、おとなりの福島県にも見られ、より変化しない原形の姿を、一部に見ることができるといような結論が出せるように思われる。

VI

次に、では、「い」という文末詞はどのような生じたかが問題になる。先の例で、「ダイ」と「タイ」は助動詞についており、「ダ」と「イ」、「タ」と「イ」と分けることができる。しかし、「い」だけでは独立し得ない。そこで独立し得るものでこの「い」の意味用法に最も近い文末詞は何かと考えると、単純感声的文末詞

の「ヨ」である。これが「ダ」や「タ」について用いられている例も多く見ることが出来る。たとえば、

○サンニン ツレテ イッタンダ ヨ。

三人連れて行ったのですよ。(老女↓私)

○オーヤノ カンノンサンエ イッタンダ ヨ。

大谷の観音様に行ったのですよ。(老女↓私)

○ソソデテ ナガナガ クンネーナンダ ヨネー。

それについてなかなかくれないのですよねえ。(少女↓少女)

○ウマデ ムギツミモ シタ ヨ。

馬で麦積みましたよ。(中男↓私)

○マツタグ ワダシラ クローシツチツタ ヨ。

全く私ら苦労してしまいましたよ。(中女↓私)

これら例に見る「ダヨ」「タヨ」は、先の「ダイ」「タイ」とほとんど同じと言って良い。その時の調子でどちらも使われる。したがって、「ダイ」「タイ」のばあいは明らかに〔dajō〕〔tajō〕〔daj〕〔taj〕〔daj〕〔taj〕という母音〔o〕の脱落によって生じたと考えて良いと思う。それでは「ヨ」から生じたものと考えて他の「ナイ」「サイ」「セイ」「カイ」も説明がつくかどうか調べてみることにする。これらのばあいは、いずれも文末詞についている。「ダイ」「タイ」の場合は助動詞についていた。しかも、「ダイ」「タイ」とほとんど同じ用法で「ダヨ」「タヨ」が現に行なわれていた。ところが、これらのばあいは「ナヨ」「サヨ」「セヨ」「カヨ」という形は現在全く見られないのである。金田一先生の御返事にある、「いってんきだなよ。」「中々暑くてなよ。」という言い方もない。もっとも、

○ソトリデ キナ ヨナ。

一人で来なさいよね。(老男↓少男)

というような例が見えるが、この「キナヨ」における「ナ」は「『する』『なす』の特殊な命令形『なさい』が補助動詞として動詞の運用形についた(広辞苑)」形のつゞまったものであるから性質が違う。また

○ドーシテモ イヤダツターノ カ ヨ。

どうしてもいやだというのかよ。(昔男↓中男)

というような例もあるが、これでは、丁寧や尊敬どころか相手をおどしたり難詰したりする口調になってしまう。

こう見て来ると、どうも先の「ダイ」「タイ」における「イ」と、後の文末詞につく「イ」とは性質が違うのではないかとも思われるのである。前者が助動詞につき、後者が文末詞につく。後者のばあいは熟合の度合も前者とは比べものにならない程に進んでいる。(例えばサイ↓セイ↓セイ、カイ↓ケという具合に)熟合の度合が進んでいるということは、時間的に相當前に結合が行なわれた事を意味し、その相當前においては「ナヨ」「サヨ」「セヨ」「カヨ」というような形での表現があったと考えられそうでもある。金田一先生はお答えの中で、「東京周辺の人の方言のさも、方言らしい響きを感じさせる語氣に『そうですか』で良いところを『そうですねですか!』という。』と書いておられるが、周辺というのはどの地方を指しておられるのだろうか。とにかく、現在における栃木県方言の資料からは次のような結論しかくだせないように思われる。

1、「ダイ」「タイ」における「イ」は、単純感声的文末詞のヤ行

文末詞「ヨ」が、母音(○)の脱落によって生じたもので「ダイ」
「タイ」と「ダヨ」「タヨ」は、ほとんど同じものである。

2、「ナイ」「サイ」「セイ」「カイ」における「イ」は現段階に
おける資料では「ヨ」から生じたかどうかを断定することはで
きない。
と。

(昭和三十七年十月七日)

(本学大学院学生)